

国際協同組合保険連合 (ICMIF) 大会2024参加報告 (下)



日本共済協会 調査研究部
 こわだ ひろこ
 共済と保険企画室長 古和田 博子

国際協同組合保険連合 (ICMIF) は、世界の協同組合／相互扶助の保険組織を代表する国際的連合体として、54カ国208の団体が加盟しています。ICMIF総会は大会と併せて2年に1回開催され、今回は2024年11月13日から15日までの3日間にわたり、「パーパスに向けたコラボレーション」をテーマに、アルゼンチン・ブエノスアイレスにおいて開催されました。

前号では、大会の目的とテーマをはじめ、「パーパスに向けたコラボレーション」をテーマに、われわれのビジネスモデルである協同組合／相互扶助の保険組織の特徴や優位性、戦略的課題などについて、三つのP（ピープル、パフォーマンス、パートナーシップ）を切り口に、会員の事例報告をもとに展開された議論や考察について2日目までの報告をしました。

今号では大会3日目について報告するとともに、大会の最後に行われた総会について報告を

します。

4. 大会セッション

(1・2月号からのつづき)

(3) 3日目のセッション2 「よりレジリエンスの高い事業を生み出すパートナーシップ」



3日目は「パートナーシップ」をテーマに、二つのセッションがあり、戦略的目標の達成とコミュニティのレジリエンス（復興力）強化に向けた取り組みに関する世界規模でのコラボレーションについて議論しました。その中で、セッション2は、レジリエントなコミュニティをどのように作るのかについて議論しました。

【アリス・アリップ博士、CARD MRI（フィリピン）創設者兼名誉会長 & ロレンゾ・チャン氏、パイオニア・グループ（フィリピン）社長兼CEO】
 フィリピンにおいて、マイクロイ

	セッション	テーマ等
1日目	テーマ：ピープル (People) 顧客中心の事業として、新たな問題に対応し競争力ある成長を推進するための人材とリーダーシップの重要性	
	1	開会式と基調セッション
	2	CEOパネル：パーパスのための利益
	3	「人を第1に考える組織の構築」
	4	「高まる顧客期待への対応」
2日目	5	1日目の考察と会場からの事例等の報告
	テーマ：パーパスおよびサステナビリティ目標と、財務的成功および新たなテクノロジートレンドを効果的に活用した業務オペレーションの効率化や優位性向上との両立	
	1	「進化するリスク環境における新たな機会の開拓」
	2	「パーパス志向の戦略の実践」
	3	「パフォーマンス向上のためのサステナビリティ」
3日目	4	「オペレーショナル・エクセレンスと価値創造に向けた変革の受容」
	5	2日目の考察と会場からの事例等の報告
	テーマ：パートナーシップ (Partnerships)：戦略的目標の達成と、私たちがサービスを提供するコミュニティのレジリエンス強化に向けた世界規模でのコラボレーション	
	1	「レジリエンスの高いコミュニティを構築するパートナーシップ」
2	「よりレジリエンスの高い事業を生み出すパートナーシップ」	
3	総会セッション：パーパスに向けたコラボレーション	

ICMIF大会プログラム (網掛け部分を本誌で2回にわたり紹介)

ンシュアランス（以下、MI）の創始者であり、普及拡大に多大なる貢献を果たしてきたアリップ氏は、MIはお互いを助ける制度で、フィリピンでは多くの団体が貧困社会削減のために、とりわけ貧困な女性を対象にMIを提供するビジネスモデルを導入していると述べました。貯金は必要なときに引き出せるのと同様に、保険は必要な時に支払われなくてはならないという信条のもと、台風や地震の被害が多いフィリピンにおいて、迅速な保険金支払いは不可欠であり、**政府とパートナーシップを組むことで保険金支払いに関する1・3・5運動（要する期間目標を1日、3日、5日以内とする）を展開してきました。今日では8・24（上述の運動をさらに短縮化して、8時間、24時間以内とする）を目指しています。**

パートナーシップを活用することで能力や知見などを高めることができ、さまざまなことを拡大することができます。例えば、ネットワークにより効率化やコスト削減効果が得られる、開発事業のノウハウを借りることができる、クライアントに融資することも可能になる、会員から会員へと信頼関係でサービスを普及できる、ことなどが挙げられます。利点を明確化したうえで、**パートナーシップにおいて重要なことは、双方が信頼関係にある、公平である、双方とも要求ではなく提供する関係性でなければならない、ことを強調しました。**

価値はわれわれが決めるのではなく市場が決めるものです。だからこそ、保険はシンプルで、アクセス可能でなくてはなりません。そして、保険料を極力上げないで、保障・サービスをより良くする必要があります。

アリップ氏は、自らの著書「NANAI」について、貧困削減のために私たちがやってきたことを、もっと多くの人に知ってもらい、この運動を拡散しなければならない、そのためにこの本を書いたと語り、最後にMIのような草の根運動のカギは女性にあると語りました。

【高橋 一成氏、JA共済連代表理事専務】



高橋 一成 氏

高橋氏は、JA共済連は「相互扶助」を理念とした協同組合保険組織で、①組合員・利用者の信頼と期待に応え、安心と満足を提供すること、②ひと・いえ・くるまの総合保障を通じて豊かな生活を築くこと、③地域社会づくりに貢献すること、の**三つの使命を果たすために、われわれは人に尽くし、心を尽くすことを意識し行動の根幹としていると強調しました。**

近年の日本の農業・農村の変化に対応し、持続可能な農業を支えるため、JA共済連は「新たな時代に変わらぬ安心を～地域とともに、農とくらしの未来を支えるJA共済～」としたスローガンを設定し、農業リスクの削減や、地域みんなが安心して暮らせる地域づくりを主眼において事業を展開しています。

台風や地震などの自然災害が多発する日本においては、被害に対する保障提供はもちろん、地域のリスクに応じた防災・減災への取り組み、災害後の地域住人等との復旧支援に尽力しており、最近では、災害を疑似体験できるVR資材やスマホのアプリによる防災情報の提供など、人々が実感しやすく、アクセスしやすい取り組みも行っています。

2024年1月1日に発生した能登地震では、発生直後に災害対策本部を設置し、地図システムや人工衛星・航空写真を活用した損害調査を採り入れたことで、共済金の迅速な支払いが実現できたと語りました。一方で地域の高齢化に起因する低い耐震化率等の問題により、復旧に時間を要するという新たな課題に直面し、レジリエンス強化に向けたさらなる取り組みの必要性に

ついて語りました。

最後にパートナーシップについて、ビデオの中で、JA共済連とJF共水連がともに地域のレジリエンスに取り組んでいることを紹介し、その重要性について触れました。未来にわたり安心と満足を提供し続けることがわれわれの使命であり、JA共済連はさまざまな変革を実践することで、持続可能な農業・地域づくりに今後も貢献していきたいと抱負を述べました。

【アレハンドロ・シモン氏、サンコール保険グループ（アルゼンチン）最高経営責任者】

シモン氏は、20以上の関係会社を有するサンコール保険グループは、50の事務所、8つの病院、766の販売代理店事務所がある中で、**事業運営のカギは連携にある**と強調しました。変化が激しい世の中で、パーパス志向のマネジメントにおいて、良い商品を作るだけでなく、財政面で健全性を高めつつ、事業の透明性、持続可能性、信頼性を確保し、社会的価値のあることを創造し、それらの実装について社会に確実に伝えていくことが重要と述べました。

またデジタルについては便宜性、透明性、柔軟性という視点で有効活用できる一方で、倫理的な活用が求められるとしました。

保険のカルチャーをアルゼンチン全土に普及することを使命とする同社にとって、**戦略的なパートナーシップは、組織の社会的価値を高め、より広範なインパクトを与えることができる手段**と位置付けています。そのため、交通安全対策や持続可能なゴール達成に向けて多くのパートナーシップを締結しています。

最後にシモン氏は、保険のカルチャーの定着には、実践的で持続可能な手法で契約者に浸透させていかなければならないと語りました。

同セッションでモデレーターを務めたICMIFのCEO（事務局長）であるショーン・ターバック氏は、JA共済連の災害に関する取り組みについて、長期にわたり継続して対応してい

ることを評価しました。

5. ICMIF総会セッション

3日間の最後のセッションは、ICMIF総会セッションで、パーパス志向の保険組織やパートナーから成り立つ会員間の効果的なコラボレーションについてICMIFがどのように動機づけし、促進できるかを検討しました。

【アリエル・グアルコ氏、国際協同組合同盟（ICA）会長】

冒頭、グアルコ氏によるスピーチがあり、ICAは105カ国300以上の会員からなり、持続可能な開発、世代を超えた発展などの課題に関して、ILOなどの国際機関と提携することで世の中の変化に対応しているとし、こうした活動は世界中の多くの機関に認識されていると述べました。

短期的な利益追求ではなく、長期的な視点での持続可能な発展を目指す「恒久的な価値」について、自らの出身母体である電力組合を例に、その重要性について触れました。協同組合は昔から地域の問題などをボトムアップで解決する組織であり、経済活動をリードしていく組織だとしたうえで、**変わりゆく世の中において、さまざまな課題に取り組むためには、われわれはイノベートしなくてはならない**と強調しました。

最後に、2025年は国際協同組合年であり、各国に呼びかけ、SDGsが達成できるように、そして、規制は妨げではなく、事業をより発展させるようなものとなるように、呼びかけていきたいと抱負を述べました。

【ICMIF総会】

3日目のモデレーターであるリズ・グリーン氏は、物事を異なる視点から見ることで、一見複雑に見える問題も解決できることがあるとしたうえで、**パーパスを持つことで、われわれは目指すべき高みを明確にし、より安全で公正な**

社会を築くことが可能となると、今大会を総括しました。

続いてICMIF総会の協議・報告事項に移り、ICMIF規約のパーパス・ビジョン・ミッションの変更、理事数の拡大などについて承認を得るとともに、今総会でCEOを退任するターバック氏から、この2年間においてICMIFが社会や環境に与えた影響や成果等の報告がありました。

ターバック氏による報告後、新たなCEOとしてリズ・グリーン氏が就任し、所信表明演説では、冒頭にターバック氏の過去20年間にわたるCEOの功績をたたえました。



左からショーン・ターバック氏、リズ・グリーン氏

さらに、世界には脆弱な地域が多く、世界各地にいる会員の力を借りて、協同組合／相互扶助の保険組織の役割をもっと伝え、もっと浸透・普及するよう導いていくために、ICMIFはさまざまなプラットフォームを提供し、われわれのビジネスモデルを強化していきたいと表明しました。

その後はターバック氏への感謝やねぎらいの言葉、懐かしい思い出話が、ハンス・ダールベルク氏を筆頭に歴代のICMIF会長からビデオレターで語られました。

最後に次回の総会が2026年11月3日から6日にトロント（カナダ）でコーポレーターズをホストに開催する旨が告げられ、ICMIF大会・総会は幕を閉じました。

おわりに

今回の大会で新たに導入された、会場からの事例の報告について心に残った事例を紹介します。ニュージーランドのFMG (Farmers' Mutual

Group) と英国のNFU ミューチュアル (National Farmers Union Mutual Insurance Society) は、それぞれの国で農業従事者のための相互扶助保険組織です。それぞれの組織のCEOはICMIFの執行委員会のメンバーとして同じテーブルに座る仲でした。2024年、ニュージーランドは大きな洪水に見舞われました。そのニュースを知ったNFU ミューチュアルのCEOはすぐにFMGのCEOに電話し、災害支援物資だけでなく人も派遣したいと申し出たのでした。FMGのCEOは組織内だけでもどうにかなるかもと思いながらも、ありがたくその申し出を受け、結果としてNFU ミューチュアルの多くの物資とスタッフによって助けられたとのストーリーを会場の全員で共有しました。

申し出た側のリーダーシップに感銘したのはもちろんですが、われわれICMIFの会員団体は、パーパスに基づいて、こうした助け合いを契約なしにできることの素晴らしさを会場が一体となって感じた瞬間だったと思います。

最後に、開会でウエッセリング会長が引用したことわざ「早く行きたければ一人で行きなさい。遠くまで行きたければ、みんなで行きなさい (If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.)」を私なりに考えてみました。日本の駅伝やF1におけるチーム力の功績からみても、想いや志のもと、早く、遠くまでの両方をわれわれは目指すことができるのではないかと思いました。

3日間の大会の後にはその土地の文化や歴史を知るソーシャルツアーもあります。2年に1回のICMIF大会・総会について多くの人に興味を持っていただけたら幸いです。

なお、次号「Web 共済と保険 4月号」ではこの大会と併せて実施されたヤングリーダーズプログラム (YLP) について、参加者からの報告がありますので、楽しみにしてください。

